

ピアノ

真嶋雄大

21世紀に入って四半世紀が経った。まさに光陰矢の如しである。日本の音楽ホールは1980年代に建設ラッシュが始まり、多くのコンサートが開催されるようになったが、40年以上が経過し、経年劣化や耐震設備による2025年頃からのリニューアル工事のため、東京芸術劇場をはじめ、東京国際フォーラム、Bunkamuraオーチャードホール、新宿文化センター、紀尾井ホールなど全面休館するホールが全国的に相次ぎ、コンサート開催に少なからず影響が生じている。

また2025年はJ.シュトラウスⅡ生誕200年、ビゼー没後200年、サティ没後100年、ラヴェル生誕150年、ショスタコーヴィチ没後50年、そしてブーレーズとベリオが生誕100年にあたるメモリアル・イヤー。鍵盤関連としてはサティにも脚光が当てられたが、就中ピアノ音楽として多数のコンサートやリサイタル、CDリリースに採り上げられたのはラヴェルであった。

ラヴェルのピアノ独奏曲について、殆どの主要作品は1回ないし2回での演奏が可能であるため、国内のリサイタルで全曲演奏が度々開催された。栗原麻樹（4月；東京）、務川慧悟（7月；大阪ほか）、佐野隆哉（9月；東京）、東誠三（5月；東京）、イリーナ・メジューエワ（6月・11月；京都）、仲道郁代（10月；東京）、ジャン・エフレム・パウゼ（全曲 10月；京都ほか）、岡本愛子（5月；東京）、横山幸雄（9月；愛知）、長尾洋史（10月；東京）など。またラヴェル「協奏曲」については務川慧悟（高関健指揮東京シティフィル、10月；東京）、清塚信也（円光寺雅彦指揮東京フィル、10月；東京）、アリス＝紗良・オット（カネラキス指揮東京都響、7月；東京）、角野未来（出口大地指揮東京響、11月；東京）、田村響（スダーン指揮富士山静岡響、11月；静岡）、パスカール・ロジェ（熊倉優指揮群響、7月；群馬）などがあり、8月「NHKパレエの饗宴2025」でダンサーとともに福井真菜が井田勝大指揮東京フィルと「ピアノ協奏曲」を演奏、パレエとのコラボレーションでその華を競った。さらには「左手のためのピアノ協奏曲」では阪田知樹（川瀬健太郎指揮読売日響、5月；東京）、舘野泉（尾高忠明指揮東京フィル、4月；東京）が玲瓏にして抒情豊かな演奏で聴衆を魅了した。

また5月の恒例「ラ・フォル・ジュルネ」でもラヴェルの独奏曲、協奏曲が演奏されたが、CDリリースも百花繚乱。パヴゼやメジューエワなどの他、チョ・ソンジン、ネルソン・

ゲルナー、ベルトラン・シャマユ、ジャン＝イヴ・ティボーデ、アンナ・フェドロヴァなど、日本人も横山幸雄、松本和将、村田理夏子などがリリースしている。

さて2025年はショパン・コンクールの開催年。第19回となった今回は多くのメディアが積極的に採り上げ、大きな話題となったが、日本からは13名が挑戦、第1位エリック・ルー、第2位ケヴィン・チェン、第3位ワン・ズートン、第4位桑原志織他という結果。エリーザベト王妃国際音楽コンクール・ピアノ部門では久末航が第2位、亀井聖矢が第5位に入賞、第9回仙台国際音楽コンクール・ピアノ部門で第1位エリザヴェータ・ウクラインスカヤ、第2位アレクサンドル・クリチコ、第3位天野薫、第4位ユリアン・ガスト、第5位島多璃音、第6位ヤン・ニコヴィッチであったが、天野はまだ11歳での快挙であった。また河合楽器創立90周年記念Shigeru Kawai国際ピアノコンクールでは第2位大山桃暖、第3位朴沙彩、第4位に山本悠流など日本勢の活躍が目立った。

来日ピアニストも活況を呈した。90歳のミハイル・ヴォスクレセンスキーは2月、横浜でリサイタルを、クリスティアン・ベザイデンホウトは4月にフライブルク・バロック・オケとモーツァルトの協奏曲を共演、アンドラーシュ・シフは3月、解散によって最後の来日となるカペラ・アンドレア・バルカと斬新なモーツァルト像を構築、日本での最後のリサイタルとなったアレクセイ・リュビモフは4月にリサイタルを、ルーカス・ゲニューシャスは4月にラフマニノフなどを、アンジェラ・ヒューイットは5月J.S.バッハ・プログラムを、ミハイル・プレトニョフは6月ベートーヴェンとグリーグ、ショパン・コンクール前回覇者のブルース・リウは6月にシャニ指揮ロッテルダム・フィルとプロコフィエフ「協奏曲第3番」に加え9月にはユロフスキ指揮バイエルン国立管とモーツァルト「第23番」を共演、その9月にはイエフィム・ブロンフマンがブラームス、プロコフィエフなどをリサイタルで演奏、アレクサンドル・カントロフは、マケラ指揮RCOとブラームスの協奏曲第1番で共演、レイフ・オヴェ・アンズネスは10月にブロムシュテット指揮N響と同第2番で共演、リサイタルでもシューマン、ショパン、グリーグを、イゴール・レヴィットは11月にシューベルト、

ショパンなどでリサイタルを、かつて時代の寵児となったスタニスラフ・ブーニンが疾病による大手術を乗り越えて復帰、リサイタルに臨んだ。そしてクリスティアン・ツィメルマンは12月、コンサート当日にプログラムを発表するという新機軸を打ち出し、シュェーベルトやドビュッシー、スタコフスキやJ.S.バッハで新たな境地を綴った。

日本人ピアニストの活動も忘れてはならない。近年若手の台頭が目覚ましいが、2025年もその勢いは止まらず、反田恭平は8月、ザルツブルク音楽祭にデビュー、指揮者、ピアニストとしてモーツァルト管と共演、11月には全国10か所のリサイタル・ツアーを敢行、南仏ラ・ロック＝ダントロン国際ピアノ・フェスティバルには、藤田真央（4年連続）とドイツ「オーパス・クラシック賞」を受賞した角野隼斗（初）が出演、藤田は4月、ルツェルン音楽祭でパヤール指揮ルツェルン祝祭管とベートーヴェン「第4番」を演奏、国内でも阪田知樹が1月、リストのピアノ協奏曲2曲、「死の舞踏」、「ハンガリー幻想曲」で角田鋼亮指揮東京フィルと共演、多くのリサイタルも開催した。前述の亀井は7月にオール・ショパンでリサイタル、川田健太郎、佐藤卓史、中谷政文、前田拓郎、本山乃弘が2022年に結成した男性ピアニスト・グループ「絆」は9月にベートーヴェンの協奏曲全曲演奏会で聴衆の支持を得た。そのほか北村朋幹、三浦謙司、石井琢磨、實川風、高木竜馬、務川慧悟、小井土文哉、第51回日本ショパン協会賞を受賞した牛田智大など男性陣に加え、女性陣は鈴木愛美、中川優芽花、黒木雪音、進藤実優などがそれぞれに真摯かつ重厚なアプローチの演奏活動を展開して新風を巻き起こしている。

むろん若手だけではない。アリス＝紗良・オットは6月にジョン・フィールドにフォーカスしたリサイタルを、小山実稚恵は6月にデビュー40周年記念リサイタルでベートーヴェンの最後期のソナタ3曲に加え、ユロフスキ指揮東京フィルとチャイコフスキーとラフマニノフの協奏曲を、デビュー30周年を迎えた近藤嘉宏は10月ショパンの協奏曲2曲を、内田光子は10月にベートーヴェン最後のソナタ3曲を、小倉貴久子は「フォルテピアノの世界」第15回を10月に開催、佐藤彦大は11月にグラナドス、ラヴェルを、福岡光太郎はベンジャミンとモーツァルトにフォーカスして聴衆を魅了した。

ベテラン勢も健在だ。杉山哲雄はベートーヴェンメモリアルに向けソナタ連続演奏会をスタート、久元祐子はベートーヴェンのピアノ・ソナタ全曲演奏会Vol.3を開催、86歳の深沢亮子は5月にモーツァルトなどでリサイタル、60年以上のキャリアを持つ北川暁子は5月にリサイタル、89歳の館野泉は前述のラヴェルや左手のための新作などを、藝大教授最後の年となった伊藤恵は、リサイタル「春をはこぶコンクールふたたびVol.6」を開催、また三大ピアノ協奏曲を一日に演奏したのが清水和音と若林顕、ともにチャイ

コフスキー「第1番」、ラフマニノフ「第2番」に加え、清水はベートーヴェン「皇帝」、若林はショパン「第1番」で喝采を浴びた。またパスカル・ドゥヴァイヨンと村田理夏子が音楽監督を務める「NAGAREYAMA国際室内楽音楽祭」が11月開催して注目された。

最後に訃報を。藤井一興が1月18日70歳で逝去したが10日前に室内楽コンサートに出演したばかりだった。マリア・ティーボは2月10日に93歳で、6月17日にはアルフレート・ブレンデルが94歳で、杉浦日出夫は5月30日に92歳で、ディヴィッド・ワイルドが10月23日に90歳で鬼籍に入った。ご冥福をお祈りしたい。

2026年は鍵盤界にとってどんな年になるのか、期待は大きい。

真嶋雄大（まじま・ゆうだい）

音楽評論家、作曲家。朝日新聞、「音楽の友」等媒体を始め、演奏会やCDの曲目解説、音楽劇の台本等の執筆、NHK-FM等への出演を続け、全国でレクチャー・コンサートやプロデュースを展開、とりわけ甲府での「特別コンサート」、岡谷での「クラシック探訪」、ペーゼンドルファー「美女と野獣」等は大好評、その模様が「日経ビジュアル音楽堂」で紹介された。著書に「ピアニストの系譜」、「ワールドと32人のピアニスト」等。YCC文化ホール等アドバイザー、「真嶋雄大の面白クラシック」主宰。